

ベトナム初の木材流通センターが開設

— 日本からの輸入拡大に期待 —

主事研究員 安藤範親

1 拡大するベトナムの木材利用

2018年の日本の木材輸出額は351億円で、前年比7%の増加と拡大傾向にある。丸太輸出量は1,160千 m^3 （17年国内丸太生産量29,528千 m^3 の4%）であり、輸出先は中国向けが8割強を占め、韓国、台湾と続く（第1図）。

このような状況のなかで、現時点では日本からの丸太輸出量は、9千 m^3 （全体に占める割合0.8%）と非常に小さいものの、今後大きく輸出拡大が見込まれる先としてベトナムが注目される（第2図）。経済発展が進むベトナムでは、木材産業が成長を続けており、家具等の木材関連製品（注1）の輸出額も拡大傾向にある。その輸出額は、06年の19億ドルから17年の76億ドルへと、10年間で4倍弱拡大している。同国政府は、この輸出額を25年までに200億ドル（2.6倍）にする国家目標を掲げており、特に家具の輸出額は今後8年で中国に次ぐ世界第2位の規模になると期待している。その一方で、ベトナム木材・林産物協会（Vifores）によると、家具の輸出額が10億ドル増えるごとに350万 m^3 の木材

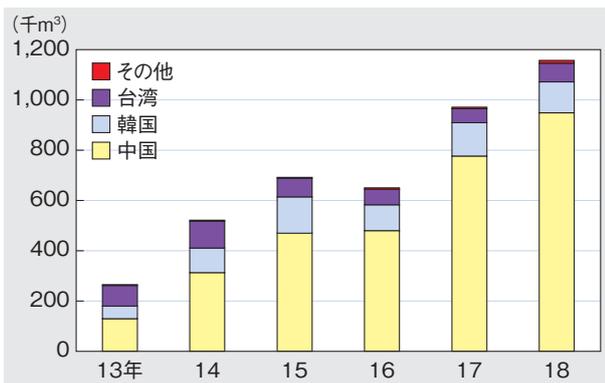
が必要になると推計されており、同国の木材産業では、原材料の調達が課題となっている（注2）。この課題に対応するように、北米や欧州、オセアニア、日本などからの合法木材を集めた木材流通センターがホーチミン近郊に開設された。

筆者は19年1月に同センターの開設記念式典に参加する機会を得た。今回の訪問で感じた同国の日本産木材への期待を伝えたい。

2 木材流通センターが初開設

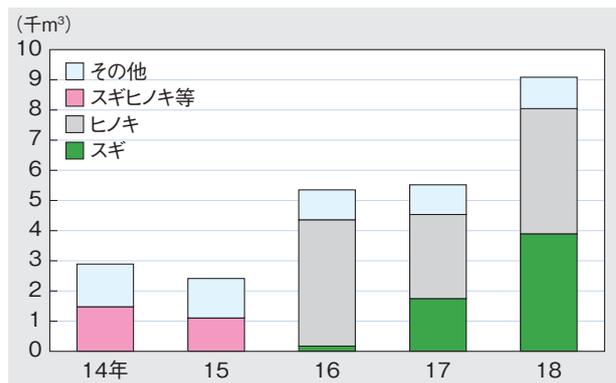
19年1月11日、ホーチミン近郊のドンナイ省ビエンホア市に同国初の木材流通拠点である木材流通センターがオープンした。同センターの開設者は、木材・合板・製材品の卸売業のほか、製材業、家具製造業を手掛ける同国のTAVICO社であり、40ha程の敷地のなかに原木・製品市場、製材工場等がある。木材の年間取扱量は、40万 m^3 （うち丸太20万 m^3 、製材20万 m^3 ）を目標としている。アメリカ、カナダ、ドイツ、フランスなどからオーク、アッシュ、ブナ、ポプラ、クルミなどの広葉樹が、

第1図 日本の丸太輸出量の推移



資料 財務省「貿易統計」、以下同じ

第2図 日本のベトナム向け丸太輸出量の推移



日本、カナダ、ニュージーランドなどからスギ・ヒノキ、ウエスタンレッドシダー、ベイツガ、ラジアータパインなどの針葉樹が輸入されており、世界の合法木材が集まっている。

3 愛媛県森連がセンター開設のきっかけ

TAVICO社が同センターを開設したきっかけに、愛媛県森林組合連合会との関係がある。同森連は、14年～15年にかけてベトナムで営業活動を行い、その後同社との取引を開始した。17年には同社の社長が愛媛県の原木市場を視察し、自国でも同じような市場を開きたいとの思いが実現したのである。

同センターの開設記念式典のステージの背景には、同森連が輸出したヒノキが並べられており同社と同森連の親密さに加え、日本産木材の輸入拡大への期待がうかがえる(写真1)。同森連は18年、西日本の他県森連と連携し、主に長さ4m、直径24cm以上のヒノキを3千㎡同国に輸出した。19年には、1万㎡の輸出が目指されている。ヒノキは、主に内装材としてフローリングなどに加工される。

4 住宅需要に期待

急激な経済発展のなかにあるベトナムでは、家具等を中心とした加工貿易のさらなる発展だけでなく住宅分野の構造用材としての木材利用による輸入拡大も期待されている。

地域性はあるがホーチミン市の住宅価格

(注1) 輸出統計品目第94類と第44類のうち4408～4421の合計値。数値は、ITC calculations based on UN COMTRADE and ITC statistics。

(注2) ベトナムの木材生産量は18年2,750万㎡。うち人工林からの生産量が18年1,850万㎡(ベトナム農業農村開発省森林総局)。人工林面積は拡大傾向にあるものの、生産品目はアカシア小径木が主でパルプ向けチップに加工されるため、木製品の生産拡大には外材輸入が欠かせない。



写真1 木材流通センターの開設記念式典(筆者撮影)

は、円換算で10万円～50万円/㎡程度である。一方、同市の最低賃金額は月額2万円ほどと、この賃金水準では一般的な労働者が同市で住宅を購入することは難しい。ただし、夫婦共働きや副業を営むなど複数の収入源を持つ世帯もあり、世帯所得の増加に伴って住宅が購入されており、今後の住宅需要の拡大が見込まれている。

同国の都市部の住宅は、日本の都市部にみられるペンシルビル(間口の狭い3階～5階の中層建築物)に似た外観の建物が比較的多い。躯体は鉄筋コンクリート造の柱・梁からなり、壁下地にはレンガが使われている。

今のところ、木造の建築物はほとんどなく、同センターの開設記念式典に参加した事業者からは、市街地に木造住宅を実現したいという声が聞かれ、式典の来賓挨拶では、カナダやニュージーランドの総領事が木造住宅のPRを行うなど、同国への木材輸出意向の強さが感じられた。木造住宅の実現のためには「大工の育成」や「高温多湿な気候条件下の防虫防湿対策」などが課題として挙げられているが、木造住宅が普及する可能性は日に日に高まっている。

(あんどう のりちか)